



柳田国男監修高等学校国語科教科書における单元「 随筆・随想」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 比呂己, 佐野, 理美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000069

柳田国男監修高等学校国語科教科書における 単元「随筆・随想」をめぐる

佐野比呂己
佐野理美

はじめに

稿者は、柳田国男監修検定高等学校国語科教科書（以下「柳田高校国語科教科書」と略す）の各単元について、その構成を提示し、その特徴、学習のねらいを明らかにし、他単元との関連、所収教材について検討を加え、これまで論考を発表してきた⁽¹⁾。加えて、単元「随筆・随想」所収各教材についても、稿者は詳細に検討を加えてきた⁽²⁾。しかし、これらは教材単体での研究であり、単元全体、教科書全体からの見直しが必要である。本稿は、これらの拙稿を受け、柳田高校国語教科書における単元「随筆・随想」の構成を提示し、その特徴を明らかにし、学習のねらいについて検討を加えようとするものである。

1 単元「随筆・随想」について

単元「随筆・随想」は第一学年第一単元にあたる。

単元「随筆・随想」は、この教科書の最初に置かれた単元である。要するに柳田が携わった高等学校用国語科教科書のオーブニングを飾る単元であるということである。トップにあるのだから、他の単元と比してもこの単元が重要な位置を占めていることには相違あるまい。さらに、この教科書づくりに際し、柳田は「読書のつど適当と思われるものを候補作品として編集委員の方へ回付」し、柳田の「手からわたってくる教材がいちばん多いくらいに熱心に選択」していた⁽³⁾のだから、この単元の教材が柳田の選定によるものと推測するに難くはない。この単元に対する柳田の思いは強いものがあると推測する。

単元「随筆・随想」のねらい、位置づけ、特徴等を教師用指導書⁽⁴⁾の記述をもとに確認していく。

単元「随筆・随想」の「単元設定の理由」の項に次のように記されている。

隨筆とか隨想とかいわれる文章は、読書生活において触れる機会がかなり多く、高等学校の生徒にも親しまれている。表現が一般に難解でなく、肩も凝らずに読みこなせるからでもあり、むずかしい理屈も多くないからでもある。しかもすぐれた隨筆は、漫然と書き流された文章の底に、筆者のときすまされた叡知がきらりとひらめいていたり、人生に処する上にかげがえのない教訓がひよいと首をのぞかせたりしている。気楽に読んでいううちに、哲学や宗教、科学や歴史などの書物からは得られない知恵を与えられるのは隨筆である。

ようやく文学に関心を持ち、また人生についても考えをひそめるようになり、内省的思索的になってきたこの期の生徒に、精神的なかでを与える意味で隨筆を読ませることは意義の深いことである。高等学校に入学したばかりで、身心ともにまだ高等学校の生活に慣れていない生徒にとつて、理屈ばった文章や抵抗の多い文章では、学習の効果をあげにくいので、第一単元としては、興味を持ちながら楽に読める隨筆を取りあげることにしたのである。⁵⁵⁾

第一学年第一単元として「隨筆・隨想」を設定した理由として、「学習の効果」をあげている。高等学校に入学したばかりであり、義務教育段階と大きく異なる環境である高等学校の生活に慣れるまで時間を要することはいうまでもない。それは授

業においても同様のことがいえる。授業で扱う教材の難易度も種類も考慮する必要があることは自明のことである、そういう意味で「隨筆・隨想」教材はまだ高等学校の生活に慣れていない入門期の学習者にとって、興味を持ちながら気楽に読めるものであるとしている。この時期の高校生の読書生活においても隨筆・隨想と接する機会も多く親しまれており、適当であるとしている。

単元名は「隨筆・隨想」であるが、隨筆とは何か、隨想とは何か、また、タイトル「隨筆・隨想」とした理由についてはどこにも記されていない。

「単元設定の理由」の項には続けて、次のように記されている。

隨筆は、大別して次のようなものに区別することができるであろう。

- 一 知識的方面を主とした記録的、考証的なもの。
- 二 情趣的方面を主とした文芸的なもの。
- 三 批判的、内省的傾向の濃い哲学的なもの。

そうした隨筆のいろいろな形態や内容についての理解を深め、隨筆の読み方を会得して、生活に役立たせようとするのが本単元のおもなねらいである。⁵⁶⁾

隨筆を三つに大別し、いろいろな隨筆を学ぶことによつて、

その内容や形態について理解を深めるとしている。さらには、理解のみにとどまらず、「読み方」の習得、「生活」に役立たせようというねらいにも注目したい。多様な随筆に触れ、その「読み方」を習得することによって読書の対象を広げ、読書生活を豊かにしようというものである。

「単元設定の理由」の項には続けて次のように記されている。

なお、生徒は、日常生活の中に生起する身辺的なものや自らの手で書き表わすことに興味を覚え、欲求を持っている。本単元の学習の発展としては、生徒のそうした興味や欲求を満足させるために、高校生らしい随筆を書く技能や身につけさせ、また経験を持たせることも計画されてしかなるべきであろう。⁽⁷⁾

加えて、「学習の発展」として、学習者の身のまわりにある興味、関心を持ったことを書き表すことも視野に入れている。随筆を書く技能、経験についても計画することを推奨している。理解はもちろん、読み方や、生活に役立たせることを重要視し、理解（読み）と表現（書き）を総合的にみようとする姿勢がうかがえる。

ここで、単元「随筆・随想」での単元目標を確認する。

1 随筆とは、どんなものか、どういう種類や特色がある

かを理解する。

2 随筆の特色に留意し、表現のうまみを味わう。

3 筆者が文章の効果をあげるためにどんな配慮をしているかを調べる。

4 文章の組立に留意して読む。⁽⁸⁾

単元全体を通して、この四つの目標を提示している。

1、2では、随筆とは何か、その種類、特色を理解し、表現を味わうとしている。学習者はこれまでも随筆を読む機会は少なくなかったはずである。これらの学習を通して随筆に対して自覚化することであろう。また「表現のうまみ」を味わうことで筆者の思いとことばの豊かさを認識するであろう。

3、4では、随筆の形態や内容についての理解を深めるとともに、随筆の読み方を習得させようとするものである。これらの学習が随筆を書く技能にも応用されることはいうまでもない。教材と日常生活の対象化を求めている。学習を通して、自身の日常生活をかえりみることで、無自覚であったものが自覚的に見えてくることを期待している。

2 教材について

単元「随筆・随想」は次の五編で構成されている。

一 浅春随筆（枅内吉彦）

- 二 大蛇・小蛇（片山広子）
- 三 地図をいろどる（鏗木清方）
- 四 かみなりさま談義（東条操）
- 五 ろくをさばく（三淵忠彦）

教材には、個性あふれる随筆・随想が並ぶ。いずれの教材も他社には採択されていない。

「浅春随筆」（栃内吉彦）は、北海道に住む植物学者である筆者が北海道の自然と接し、春の訪れを感じるといふものである。日本の標準的な桜の咲く春ではなく、北海道という一地方の春が描かれた随筆・随想である。また、自然の実際の姿を表す描写も見事である。教育の地方分権化、教育の民主化という、柳田の思いが表れている。心情に偏らず、事実在即して記述しているところにも特徴がみられる。

「大蛇・小蛇」（片山広子）は、古今東西の蛇に関する話題を集め、最後は自分自身の蛇にまつわる話題でしめくくるといふ文章構成の随筆・随想である。日本の古典、海外の話題を取り上げ、文章には筆者の博覧強記がうかがえる。学習者には表現のすばらしさ、文章の巧みな構成に着目させたいところである。また、第三単元「古文入門」との連関も意識している。教材文には、「古事記」「日本書紀」「古今著聞集」「太平記」などの蛇に関する話題を取り上げている。学習者が事前に古典と触れる機会を設けている。

「地図をいろどる」（鏗木清方）は、日本画家である筆者が色鉛筆で武蔵・下総・常陸の地図に湖沼、川を青色で、自分自身が歩いた道を赤色でいろどり、思いを馳せるという随筆・随想である。物事を深く観察する画家の文章からその見方、感じ方に魅力を感じるところであろう。少年時代、柳田は利根川沿いの辻川で過ごしている。この文章も利根川の話題が多くを占めている。また、赤松宗旦の『利根川図志』を岩波文庫から発行する際には、柳田が校訂を施し「解題」もそこに記している。加えて第二学年第二単元「読書」にはこの「解題」を教材として所収している。この教材選択に柳田の強い思いが推測できる。⁹⁾

「かみなりさま談義」（東条操）は、方言学者である筆者の「かみなり」という身近なことばに関して、歴史的な視座と地理的な視座から専門外の人間にもわかりやすく書いた随筆・随想である。学習者は地域による語の相違や、歴史的な語の変遷に興味を覚えることであろう。本文には「万葉集」「和名類聚抄」「常陸国誌」「伊勢物語」などの引用も見られる。特に、「和名類聚抄」の図版がそのまま教科書に掲載されているのも興味深いところである。「大蛇・小蛇」と同様に第四単元「古文入門」との連関が確認できる。「蝸牛考」をはじめ柳田自身も地方のことばには強い興味を示している。ここでも教材選択について強い思いが推測できる。

「ろくをさばく」（三淵忠彦）は初代最高裁判所長官による筆者の法律観、法律の限界が述べられた随筆・随想である。戦

後、三権分立となり政治と裁判が分化したことにより窮屈となった現状が記されている。生活を保障すること、生活を安全にする精神を尊重することを心がけたいと結んでいる。本文には「折たく柴の記」の内容の話題もあり、「大蛇・小蛇」「かみなりさま談義」と同様に第四單元「古文入門」との連関が確認できる。

前述の通り、柳田高校国語科教科書は、随筆を三つに大別している。「記録的・考証的なもの」としては「かみなりさま談義」「ろくをさばく」が、「文芸的なもの」としては「浅春随筆」「大蛇・小蛇」「地図をいろどる」がそれぞれ分類されることである。いずれの随筆・随想も高校生にとっては興味深いものであると思われる。しかし、「哲学的なもの」に分類されるものが見当たらない。「随筆のいろいろな形態や内容についての理解を深め」という単元のねらいからいけば、片手落ちは否めないところである。

3 「問題」について

各教材本文の直後に「問題」が附されている。この「問題」から、単元「随筆・随想」での学びを確認する。

教材ごとに確認していく。

【浅春随筆（栃内吉彦）⁽¹⁾】

一 春の気配の近づいてくるのはどういふところからわか

るか。

二 感覚的描写の特にすぐれているところはどこか。

三 この文章に現れた自然に対する人間の解釈についてどう感じたか。

四 春の訪れを知らせる各自の地方の動植物を考え、文章に書いてみよう。

【大蛇・小蛇（片山広子）⁽²⁾】

一 すぐれた表現と思われる箇所はどこか。

二 この文章の組立はどのようなようになっているか。

三 各自の知っている動物説話をあげてみよう。

【地図をいろどる（錦木清方）⁽³⁾】

一 筆者の画家としての見方、感じ方、書き表し方も出ているところはどこか。

二 地図をいろどることは筆者にどんな意義があったか。

三 筆者が地図をいろどることに興味を覚えた条件として、どんなものが考えられるか。

【かみなりさま談義（東条操）⁽⁴⁾】

一 とかく文章を堅くしがちな素材を表現するにあたって、筆者はどんな工夫をしているか。

二 各地方で特徴的な俚言といわれるものをあげてみよう。

三 方言調査にはどんな方法があるか。

【ろくをさばく（三淵忠彦）⁽⁵⁾】

一 この文章を読んで法律の限界について考えてみよう。

二 この文章を効果的ならしめるために、筆者はどんな用意をしたと思うか。

三 ここに掲げられた五編の、文章上のそれぞれの特徴を述べ、比較してみよ。

これらの「問題」から、単元「随筆・随想」ではどのような授業が展開されるのか推測する。

① 詳細な読解は行わず、いくつかの教材について読解のポイントのみを示し学習する。

② 文章表現に着目し、すぐれた表現を見出す。

③ 文章構成に留意する。

④ 筆者の工夫、思いについて着目する。

⑤ 教材本文の学びに関連し、発展した学習を展開する。

⑥ 五編の文章上のそれぞれの特徴を述べ合う。

① 詳細な読解は行わず、いくつかの教材について読解のポイントのみを示し学習する。

「浅春随筆」一、二、「地図をいろどる」二、「ろくをさばく」一がこれにあたる。本文の一部分を示し、そこに着目して、説明したり解釈したりする設問があるのが一般的である。しかし、単元「随筆・随想」にはそういった設問はない。読解のポイントを示すこととどまっている。さらに読解でとどまらないと

ころに特徴がある。「浅春随筆」一は二の「感覚的描写」につながり、「浅春随筆」三は「人間的解釈」をどう感じたかまでの学習を求めている。「地図をいろどる」二は三の「興味を覚えた条件」の推測につながり、「ろくをさばく」一は「法律の限界」をどう考えるかまで学習を求めている。加えて、「大蛇・小蛇」かみなりさま談義」には読解に関する設問自体がない。詳細に読解することよりも、文章から感じたり、想像したり、考えたりすることを大切にしていることがうかがえる。

② 文章表現に着目し、すぐれた表現を見出す。

「浅春随筆」二、「大蛇・小蛇」一がこれにあたる。「地図をいろどる」「かみなりさま談義」「ろくをさばく」には該当する設問は見られない。しかし、単元目標には「随筆的特色に留意し、表現のうまみを味わう。」とあり、第一教材、第二教材で学習することにより、第三教材以降においても「すぐれた表現」を意識することになるであろう。加えて、「すぐれた表現」に触れることで学習の発展として随筆を書く際にも応用できることであろう。

③ 文章構成に留意する。

「大蛇・小蛇」二が直接的に、「かみなりさま談義」一、「ろくをさばく」二が副次的にこれにあたる。「大蛇・小蛇」二では「文章の組立」そのものを把握し、「かみなりさま談義」一、

「ろくをさばく」二では、筆者の執筆の際の取り組み、工夫から自ずと文章表現に学習者の考えが至ることが推測させるものである。これも、学習の発展として随筆を書く際にも応用できるものである。

④ 筆者の工夫、思いについて着目する。

「地図をいろいろ」二、三、「かみなりさま談義」一、「ろくをさばく」二がこれにあたる。「筆者が文章の効果をあげるためにどんな配慮をしているかを調べる」という単元目標にも適う設問である。筆者の文章を書く前の準備、相手意識、執筆動機に着目し、工夫していることを検討するものである。これも、学習の発展として随筆を書く際にも応用できるものとなる。

⑤ 教材本文の学びに関連し、発展した学習を展開する。

「浅春随筆」四、「大蛇・小蛇」三、「かみなりさま談義」二、三がこれにあたる。「浅春随筆」四、「大蛇・小蛇」三、「かみなりさま談義」二は教材本文の内容と学習者の身のまわりにある事象に目を向けさせる設問となっている。「かみなりさま談義」三は研究そのものに注目させ、興味を持たせる設問となっている。随筆を書く際の素材となるものである。いずれも柳田の興味とも重なっているところにも注目したい。

⑥ 五編の文章上のそれぞれの特徴を述べ合う。

「ろくをさばく」三がこれにあたる。単元全体を振り返る意味でも意味のある設問となっている。「文章上のそれぞれの特徴」とあることから内容にとどまらず、文章そのものを検討するものとなる。複数の随筆を比較をさせることで、教材を絶対化せず、相対化することによって、学習者がより主体的に文章を受け止めさせることができるであろう。単元全体の学びを振り返ることで随筆を実際に書くという経験に発展させようという意図がうかがえる。

おわりに

以上、「柳田高校国語教科書」第一学年第一単元「随筆・随想」の特徴、学習のねらいを明らかにした。第一学年において配置された単元との関連性も踏まえつつ、「柳田高校国語教科書」における単元「随筆・随想」をとらえることを試みた。概ね論じられたと確信している。

しかし、他単元との連続性、関係については踏まえる程度であり、詳述に至っていない。例えば、次単元「生活と記録」所収教材の「わが家の商売」（吉野作造）、「私の受けてきた教育」（山川菊栄）も「随筆・随想」にあたりと解することもできるであろう。その他にもそういった教材が散見されることである。それらの単元、教材にも言及すべきであろう。

さらに、単元「随筆・随想」が、高等学校国語教室でどのように扱われたのかも確認が必要である。現代の国語教室におい

てはこれらの教材を活用し実践を行い、時代を超えてこれらの教材には価値があることも報告がなされている。一方で、当時の国語教室ではどうであったかについては十分に検討されていない¹⁰⁾。増淵恒吉は、この教科書を活用し授業に取り組んでいる。当時の授業の様子は、『増淵恒吉国語教室の実際 都立日比谷高等学校時代の国語学習記録 (DVD-ROM)』(山本義美、世羅博昭編著 溪水社 平成二十六年(二〇一四)七月)に残る。増淵は「柳田高校国語教科書」の編集者の一人であり、「柳田高校国語教科書」を実際に活用していた。『増淵恒吉国語教室の実際』には、都立日比谷高等学校での「国語学習記録」が学習者の手によって記されている。これを参照することで単元「随筆・随想」が当時の増淵の国語教室、国語科授業においてどのように扱われ、学習者がどんな反応であったかを明らかにすることができるであろう。

これらの課題については、別で述べることにする。

(注)

(1) 稿者はこれまで以下の論考を発表している。

- 「柳田国男監修高等学校国語科教科書における「記録」(1) 単元「生活と記録」を中心に」(『国語論集18』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 令和三年(二〇二一)三月 一〜一三頁)

「柳田国男監修高等学校国語科教科書における「記録」(2)

単元「事実と記録」を中心に」(『国語論集19』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 令和四年(二〇二二)三月 七〜一三頁)

「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「読書」をめぐって」(『語学文学』第六十一号 語学文学会 令和四年(二〇二二)十二月 五〜十六頁) (以下「単元「読書」論文」と略す)

「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「小説」をめぐって」(『国語探究』第二号 国語探究研究会 令和五年(二〇二三)三月 一〜一頁)

「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「古文入門」をめぐって」(『国語論集20』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 令和五年(二〇二三)三月 一六〜三〇頁)

「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「紀行」を検討する」(『解釈』第六十九巻第五・六号 解釈学会 令和五年(二〇二三)六月 五二〜六一頁)

「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「学問への道」をめぐって」(『国語探究』第三号 国語探究研究会 令和五年(二〇二三)九月 八〜三三頁)

(2) 稿者はこれまで以下の論考を発表している。

「教材「浅春随筆」考」(『釧路論集』第三十九号 北海道教育大学釧路校 平成十九年(二〇〇七)十一月) 一〜一三頁

「教材「ろくをさばく」考(1)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第五十九卷第一号 平成二十年(二〇〇八) 八月一〜一六頁

「教材「大蛇・小蛇」考(1)」「釧路論集」第四十号 北海道教育大学釧路校 平成二十年(二〇〇八) 十一月 一〜一頁

「教材「大蛇・小蛇」考(2)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第五十九卷第二号 平成二十一年(二〇〇九) 二月一〜一六頁

「教材「ろくをさばく」考(2)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十卷第一号 平成二十一年(二〇〇九) 八月一〜一六頁

「教材「ろくをさばく」考(3)」「釧路論集」第四十一号 北海道教育大学釧路校 平成二十一年(二〇〇九) 十二月一〜一頁

「教材「ろくをさばく」考(4)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十卷第二号 平成二十二年(二〇一〇) 二月一〜一四頁

「教材「ろくをさばく」をめぐって」『国語論集7』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 平成二十二年(二〇一〇) 三月 六〜三五頁

「教材「ろくをさばく」考(5)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十一卷第一号 平成二十二年(二〇一〇) 八

月 一〜一五頁

「教材「地図をいろいろ」考(1)」「釧路論集」第四十二号 北海道教育大学釧路校 平成二十二年(二〇一〇) 十二月 一〜一四頁

「教材「ろくをさばく」考(6)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十一卷第二号 平成二十三年(二〇一一) 二月 一〜一六頁

「浅春随筆」をめぐって」『国語論集8』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 平成二十三年(二〇一一) 三月 一九七〜二二七頁

「教材「ろくをさばく」考(7)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十二卷第一号 平成二十三年(二〇一一) 八月 一〜一四頁

「教材「かみなりさま談義」考(1)」「釧路論集」第四十三号 北海道教育大学釧路校 平成二十三年(二〇一一) 十二月 一〜一四頁

「教材「ろくをさばく」考(8)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十二卷第二号 平成二十四年(二〇一二) 二月 一〜一三頁

「教材「地図をいろいろ」考(2)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編) 第六十三卷第一号 平成二十四年(二〇一二) 八月 九〜二二頁

「教材「地図をいろいろ」考(3)」「北海道教育大学紀要」(教

育科学編)第六十三卷第二号 平成二十五年(二〇一三)二月 一〜一六頁

「教材「地図をいろいろ」考(4)」「国語論集10」北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 平成二十五年(二〇一三)三月 七九〜九七頁

「教材「地図をいろいろ」考(5)」「釧路論集」第四十五号 北海道教育大学釧路校 平成二十五年(二〇一三)十二月 一〜九頁

「教材「かみなりさま談義」考(2)」「北海道教育大学紀要」(教育科学編)第六十四卷第二号 平成二十六年(二〇一四)二月 一〜一五頁

「教材「かみなりさま談義」考(3)」「国語論集11」北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 平成二十六年(二〇一四)三月 六七〜七六頁

「教材「かみなりさま談義」考(4)」「釧路論集」第四十六号 北海道教育大学釧路校 平成二十六年(二〇一四)十二月 一〜一〇頁

「教材「かみなりさま談義」考(5)」「国語論集13」北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 平成二十八年(二〇一六)三月 一四〜三〇頁

(3) 大藤時彦「柳田先生と国語教育」『教室の窓』東京教育研究 昭和三十七年(一九六二)十月 七頁

(4) 「国語」研究会『国語「学習指導の研究 高等学校一年全」

昭和三十二年(一九五七)一月 東京書籍

(5) 注(4) 五頁

(6) 注(4) 五頁

(7) 注(4) 五頁

(8) 注(4) 六頁

(9) 注(1) 単元「読書」論文

(10) 柳田国男監修『国語 高等学校一年上』(昭和三十二年(一九五七) 東京書籍 八頁

(11) 注(10) 一六頁

(12) 注(10) 二一頁

(13) 注(10) 二八頁

(14) 注(10) 三三頁

(15) 「地図をいろいろ」授業考 増淵恒吉「国語学習記録」から『語学文学』第五十四号 語学文学会 平成二十七年(二〇一五)十二月 一三〜二七頁

附記 本稿は、科研費(21K02428 19K02735)の研究成果の一部である。

本稿は、佐野比呂己が全体を構想し、佐野理美が補助したものである。